

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 278 回 ディスコミュニケーションの、癒しの潤滑油

2008.10.5

人間は、一人ひとり顔が違いうように、性格、スキルは全くマチマチ。つまり価値観の違う連中が集まって、色々なコミュニティを構成している。だから基本は、「自分と全く同じ考えの人はいない」ということ、極、当たり前のことである。仮にこの原理を「**無理解の常識**」と名付けておく。

が、その原理・原則を、往々にして忘れてしまう事、しばしばである。「何で私が言っていること、分からないんだ！」そう、思ったり、怒鳴ったり、誰でも覚えはあるだろう。正にその時が、「無理解の常識」を忘れた瞬間である。

でも、いかなる人間でも、理性がある。感情と本能だけでは、野生の王国と同じかもしれない。この理性をコントロールすることで、人間らしいコミュニケーションができるのであろう。つまり、自らをコントロールする力=自制力が、円滑な人間関係を築き、信頼と信用を育てていく原動力といえるのである。

ここまでは教科書でも分かることである。では、具体的にどうしたらいいのだろうか？ここからは持論、小生流の考え方であるゆえ、異論、異議、多々あること、自覚している。

まず、俺が、俺がの「我」を捨てることの自制力（自己抑制力）である。「**無我**」になった時始めて、相手の顔が見えてくる。そして、できる限りその相手から、情報を収集しようとしてアンテナを伸ばしきる。言葉のみならず、顔の表情、態度・しぐさ、あらゆる要素から読み取る努力をすることである。小生勝手に、この行動を「**怒の実践**」と呼んでいる。

「怒」とは、漢字の通り、心の如くと書く。この心を自分の心から、相手の心に書き換えることがポイントになる。その相手とはコミュニティによって違ってくる。最小のコミュニティが家族、恋人であれば、夫（妻）の心、子供の気持ち、姑の心等々、それが相手になる。ビジネスであれば消費者、顧客の心理やニーズ、会社であれば従業員の気持ち、利害関係者の関心、ボランティアであれば、仲間や奉仕を受ける人達の心ということに他ならない。これができるか否かは、自己抑制、つまり、セルフコントロールする力である。

感情の多感な人、それがもろに顔や行動に出るタイプ、B型や女性に多いというが、とんでもない。そんな法則は無く、いまどきの若者はすぐぶちギレする。自分の偏見的へばプライドから抜け切らず、自己中心で相手のことなど考えられない、典型的タイプである。

「何でこんな事言ったりやったりするのだろう」...止せばいいのにと誰もが思うこと、平然とやってしまう人間、我々の周辺にも時々見受けられる。つまり、全くデリカシーのかけらも無い奴、相手の顔が見えているはずが無い。

「何で私ばかり...」「自分はこんなに一生懸命やっている...」「やる事はやっておきました...」「それは出来ません、分かりません...」こんな言葉をいつも口にする人、殆んどジコチュウ（自己中心型）であるゆえ、要注意である。

「無理解の常識」を根底に、「無我」になり「怒の実践」というプロセス、ギクシャクしたディスコミュニケーション社会の、癒しの潤滑油になるはずだと思っている。